研究課題　東大寺文書の近世・近代

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　森哲也（九州大学）

　所内共同研究者　遠藤基郎

　所外共同研究者　坂東俊彦（東大寺史研究所）・三輪眞嗣（神奈川県立金沢文庫）

研究の概要

（１）課題の概要

　本研究課題は、個別文書の活用に際しては、現在に至るまでの文書群の形成、伝来の過程を踏まえておく必要があるとの観点に立ち、東大寺文書（東南院文書を含む）を対象として、現状の成立に深く関わる近世・近代の様相を把握しようとするものである。具体的には、史料採訪側（近世では水戸徳川家、加賀前田家等）が作成した点検記録と、東大寺側の記録（『東大寺執行所日記』等）とを照合することで、具体的な採訪過程、書写された文書・典籍を確認する。合わせて各院家・組織の変遷を踏まえながら、現状の成立過程、所属した文書群等を明らかにするための基礎的考察を行う。また、寺外所在の東大寺文書に関し、伝来に関わった人物の関係史料、状況を記す陳述史料、東大寺内の記録等を分析することにより、寺外流出の事情・背景、伝来過程等を解明する。その成果を公開することで、必ずしも当該分野に関心が高いとは思われない近現代史研究者の注意をも喚起し、未知あるいは現蔵者不明の文書に関して、所在や関係史料等の情報提供につながるようにする。

（２）研究の成果

　まず研究会における報告を中心に述べる。森報告は、天和元（一六八一）年の水戸徳川家、加賀前田家による東大寺への史料採訪の過程と、その際に調査、書写された文書・典籍を具体的に比定するもので、当該期における東大寺文書の状況を考える基礎的考察と位置付けられる。これに関して、坂東研究員から加賀前田家の史料採訪に関わる史料が奈良大学に所蔵されている旨の情報が示されたので、二〇二二年度に調査を予定している。江戸期に実施された称名寺への史料採訪を対象とする三輪報告によると、東大寺と同じ採訪主体の事例も確認され、採訪事業の性格・意図を考える上で重要な手がかりとなる。坂東報告は、『東大寺要録』写本の調査・分析を通じて、典籍・文書の状況と近世東南院の歴史との関係を考察し、遠藤報告は、近世～近代における東大寺文書の調査・整理の歩みを確認した上で、個々の特徴、関心の変化を指摘するとともに、現状成立過程への見通しを示す内容であり、これらの成果を踏まえながら、二〇二二年度の研究を進めてゆく予定である。  
国立公文書館（内閣文庫）所蔵の東大寺文書に関わる小原竹香（正棟）の事績を知るため、津山郷土博物館所蔵の史料を調査した。東大寺との直接の関係を示す史料は見出せなかったものの、彼の人的交流など東大寺文書流出の背景を探る手がかりとして、今後も参照する余地が残っている。活字化された古書籍関係史料から、東大寺文書、奈良の文化財等に関連する記載を抽出したが、これは近・現代における東大寺文書の寺外流出、その後の伝来を探る上で手がかりとなるものである。